

高島高詩集

続北方の詩



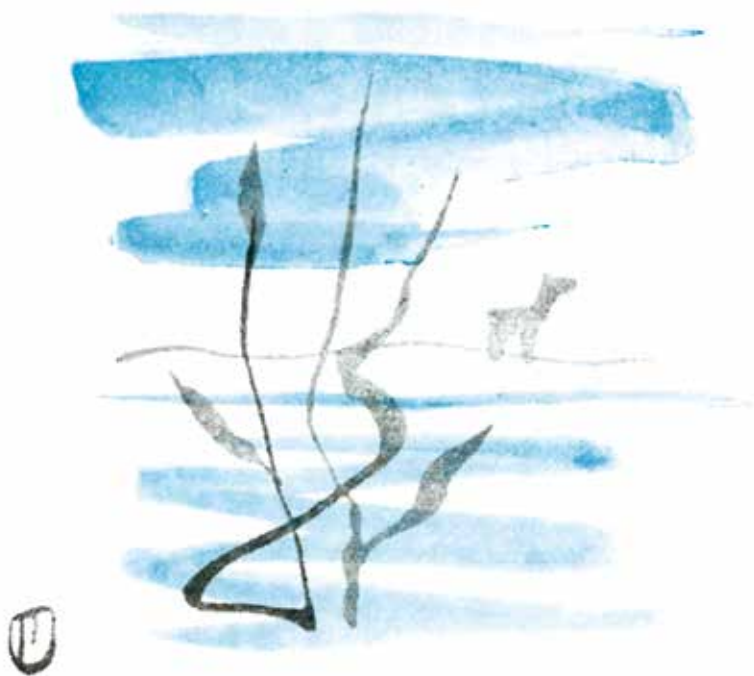
北方詩社 刊行

高島高詩集
続北方の詩

北方詩社 刊

高島高詩集

続 北方の詩



北方詩社 刊行

いざ来たりて、不滅なる自然の
眠りの帷とばりより立ち出づるを見よ。
かくて、われら、自然とともに
さしのぼる陽のいち早き光に蘇よみが生
へらんとす！

——ミュッセ——

こころ

——序詩として——

高島

高たかし

雪のうす青きその透明
その陰影のふるいつつ
青天寒きそのしじま
ひびきも絶えて消え去りぬ



カ
ツ
ト
内
田
巖

光が詩とよむのだ
詩が光とよむのだ
光が詩とよむのだ
光が詩とよむのだ

続 北方の詩

(第一部)

続北方の詩 目次

続北方の詩	一	雪	三二
北の讃歌	三	鷹の歌	三四
ペートーヴェン頌歌	五	北方物語	三九
北のカレンダー	二	東京夜景	四二
北の故郷	三	或る日の北国	四八
アルプス図譜	一五	薔薇	五一
冬	一八	李太白	五三
冬	二一	人間	五六
春に立てば	二四	水のほとり	五八
翹望	二五	牧歌的風景	五九
下山	二六	島	六〇
白鳥について	二九	典子詩抄	六〇

曇日	六三
克服の頌	六四
雪と思想	六五
波止場で	六六
蜚鳥賊	六七
直江津挽歌	六八
冬の旅	七一
別れ	七八
蜚鳥賊	七八
田中川有感	七九
春と滑川	八〇
あとがき	八二
追録	八六

続 北方の詩

光りはじめる外輪山の頂

オパールが刷毛^{はけ}で

朝陽がだいたい色にひろがる

ただよう紫雲は一つの思想

それは古代アラビア人のような神秘

劔岳が見え

立山が見え

一つの思惟^{しゐ}のように風が走る

氷の原に

燃えるもの

生の拡張

いのちのたたかい

風景は生きる

風景はいどむ

「精神と生における距離の接近へと」

力のモニタージュ

平等主義への抵抗

一本の短剣が

すでに僕の胸憶きこの中で鞘走さおる

すべて怯懦きょうだなるものは存在そんざいでない

一本の短剣はすでに僕のものであろう

僕の自在であらう

*臆病で気が弱いこと

北の讃歌

一つは生へ

一つは死へか

幾千の雪崩は

底知れぬ谷間に向って

一つは生へ

一つは死へか

今日もアルプスの万年雪をかすめ飛び

一羽の鷹たかは

その翼の張りを張りつめる

悩みを消したまえすみやかに

その罪悪感の罪悪感を

切り削そがれた海拔三五〇〇米メートル劔岳の岩角を

今日も昇りは始める太陽

その薔薇色ばらは

濃紫色に山脈の斜面の雪の上にかげろいひろがり

たくましきいのちの実在をつげるか

希望こそあらゆる人間の権利たるべきであるというように

アルプスはその朝を誇りそうごん荘厳し告知する

ベートーヴェンしよつか頌歌*

恩寵おんちゆうのきざしとは

人の世の風雨

不幸の呼ぶ声であろうか

つんぼ*の裏切られ者の孤独の

* 誉め讃える歌

* 神や主君から受ける恵み、慈しみ

* 耳の聞こえない人

せむしの現実*

*背骨が突起して弓状に曲がる病氣の人

神の栄光とは

癒やし^いがたき魂の傷のことを云うのであろうか

ルードヴェツチ・フォン・ベートーヴェンは

のたうつ

流血の指先が

人生に向って

巨大な挑戦のトーンを打ち出す

神の慈愛とは

このようなハーモニーならざる

ハーモニーにのみかがやくのであろうか

ハレルヤ

ハレルヤ

微風そよぐ六月の緑の牧場が

野^の薔^ば薇^らを散りこぼす森のほとりの水車小屋が

灰色の運命の手が

心澄ます月光が

そして又ごうごうたる夜の雪炎せつえんが

天にまで燃えけむり上る心象

ハレルヤ

ハレルヤ

人生は生き得る

ハレルヤ

ハレルヤ

人生の糧かたこそは真実いっせ一途あるのみと

この喜戯*は

笑うべきであろうか

知らずさかんなる意慾よ

知らず惨さん膽たんたる不幸よ

太々しくチエロのG線が引き鳴らされる時

神はこのいとし子のところに

つねに君臨くんりんしたまいしという

*嬉戯のこと。うれしそうに遊び戯れること。

指太くピアノのキーがたたかれた時

神はつねに

このいとし子に恵みたまえしという

それは永遠の愛と名づけられるべきであろうか

それは永遠の生命と名づけられるべきであろうか

それは今も尚力なほつよく鳴りひびく無限のアレグロ・モデラート　そしてフーガとアンダンテ

永遠の勇気の源泉

北のカレンダー

鳥はいつも一つの山を目あてにはしない

鉛の空には無数の雪が秘められて

鳥がやがてあの山脈の頂の上で死ぬる

雪はすべて宇宙的だと思う

氷原という言葉を想像してみよう

ここで生きることは

燃えることでなければならぬ

氷の火よ、火の氷よ

人間の永生えいせいは

一片のカットグラスをかすめるだろう

一日は沈潜ちんせんする

思想は根づよく裸木にまつわる

湖水は青く鋭くあなたに光っている

それはふる雪のためであることをたしかめる

黄昏が早く来る雪崩のように

僕の生死はともされた灯影でだまる

北の故郷

きらめけよ人の世の夢

白銀の刃物のかなた

陽はつねに祝福の光をかかけ

愛はつねに無双の力を示す

きらめけよ人の世の夢

白銀の刃物のかなた

あざやかに青空を切りとる

その予言の方向について

いま光の鷹は

飛び立つか

人は生きる

生きねばならぬ

見よその襞ひだの雪の鋭さ

人はかの無言の確心かくしんの中に

アルプス図譜

—— 莊嚴なるものは愛に抱よる

君臨くんりんする万軍のエホバ

群青ぐんじょうは白く虫ばまれた孔雀羽根くじやくの感傷でもあるか

まさにオパールはらの孕むはら凶南となん*の夢に

*大志をいただき大事業をしようと試みること

しいたげられたあこがれは

生涯せいあひの傷痕きずあとを喰い破らん喰い破らん

盲めいたるものは開眼めいせよ

火の

氷の

つるぎの

しのび泣き

生きとして生きるもの

崖の

奈落ならくの灯にあつまる涙をかきあつめ

いま新雪の山容に

いどまんとするか

愛はかなしき殺人なるや

身を起すために

身を捨てよ

匕首ひしゅ*をかざせ

おのれが骨髓こつずいを刺し通せ

一つの生は存在し得る

悪はほろびん

悪はほろびん

*つばのない短刀のこと

君臨する万軍のエホバ

現出する雪はたちまち心眼しんがんの方向を馳けめぐり

きびしき闘争の歌をばうたい出さん

まさに闘争の歌をばうたい出さん

我が生れし日滅び失せよと

冬

愛は灰色の靄もやのようになしく

枯並木の目指す虚空こくうのひろさ

雲を飛ばせ雲を飛ばせ

遠い氷の山脈まで飛ばせ

何よりも生きること

掌のひびわれに無慚むざんにあつまる年歴ねんれきの泥濘ぬかるみ

はかなき夢想への挑いどみよ

墓場に墓場を重ねるといのか

わが歩みの切なき営みよ

風を孕はらめ

胸を張るといふことは

泣くことより偉大であろう

アラスカの天

サマリアの湖

お前の欲する毎日が

お前の欲しない毎日にならないように

死を警戒せよ

鉄はつめたい

孤独の中の孤独

救い上ぐべくもない人間たち

途はひとすじである

はるかに遠く凍れる山上の垂訓すいくん*に打たれよ

冬

空で鳴るのはオパールか

凍結した青空は

まるで癩かんでも立てたように灰白色のすじを立て

*新約聖書内マタイによる福音書第五章から第七章にある、イエス・キリストが山上で弟子たちと群衆に語った教えのこと

立山の方までつづいている

山では雪が白銀の

その潔癖けつぺきさの高貴を誇り

その純粋な境線を示し

わずかに羽毛のような雪を立たせて

風景の中で立命りつめいしている

(世を生きるには一つの刃が必要か)

(崩くずれないその中心を)

碍子がいしはぶんぶん鳴りながら

*電線をさらえ、絶縁するために使う磁器

あのオパールの方角をみつめている

森や家などふきさらし

(思想を充分透徹とうてつさせ)

あたりかまわず

冬という季節を

ふりまきふりまき

(僕を不思議に起き立たす)

(あの大木の青桐の裸木のように)

春に立てば

青い雪

そこから洪水のように解けはじめ

若芽や杭などに及ぼし

日々太陽をかがやかせるという

風の歌。遠いおさな児の日のように夢のように

いのちは燃え眠りを斬る

求めるものを求めがたくあるままにせず

遠い山々の膚にその意慾をばぶつけよ

われらの自由。その方向への方向。

*その到来を強く望むこと

翹きょう

望ぼう*

—— 修練の修の一字をとり修太郎と名づく

遠い日の祖先の雄志が

おまえの魂の中によみがえる日

高島修太郎

その思念の祝福のために

つねに一羽の鷹が羽ばたくのだ

一羽の鷹が根つよく羽ばたくのだ

下山

ここまでくることは大変だ
いや登山の話ではないのだ
あの山寺の和尚の柔和さだ
たとえば
君と僕が
あれらの無数の山や谷や川を踏み渡って
この朽ち果てた山門にたどりついたところで
それは僕らの理性にとつては
無益ではないが
あの和尚が云ったように
道は人にきくものではないと
云ったあの言葉が本当なのだ
實在なのだ

あのみすばらしいかつこうをした
よぼよぼ爺さんのあの和尚が
枯木に来て鳴いている
鶯うぐいすさえその肩にとまりそうな
あの静かさと柔和さは
道は人にきくものではないと
云った言葉と共に本当なのだ
實在なのだ
僕らはあくまで
内からの敵と戦わねばならないのだ
あの和尚の柔和さは
あの脈々たる気骨きこつから来ていることは
恐しい程だ
あれこそ強力と愛のシンボライズ*だ
僕らの戦いはもはや外ではなく内だ

*象徴すること

君の自殺癖へきもなおつたろう
 それだけでもこの登山は有益だった
 さあさあさつきさつきの谷のところで
 千年来の苔にぬれた冷めたいやつを一杯やって
 山を下りよう
 君方の敵は
 外ではなく内にあるということ
 言葉で云わずあの態度でしめたのだ
 懷疑しっしんも嫉心しんも
 そうだ君の自殺癖も敵だ
 そして続々と敵があらわれる
 どうだ気が晴ればれとしたろう
 山を見ろ、青空をくつきりくぎってそびえている
 孤剣が正に鳴る思いだ
 戦いだ

戦いだ

剣をとつてのみ平和があるのだ
 そら鶯うぐいすが高鳴きしている
 和尚め又静かに目をつむっているだろう
 さあ人生が少しづつわかりかけて来たじゃないか
 うんと靴紐ひもをしめ直せ
 道はたしかだぞ
 ——ああ人間が人間であるために先ず泥にまみれるか
 ——生活は卑しく理想は高くか
 青空めどこまでいってもはればれとしていやがる

白鳥について

けっして影はみだされることはない

それは生きることが滑ることだからだ

それはあくまで精神の火の統一による

雪よりも静かな原始的な思念による

同じく

時には火刑は人生にとって快適だとも思う

しかし薔薇よりもはげしく燃える日もあったのだ

空の青にも湖の青にも染まらずただよう

その音のないリズムが一瞬おれの生を救ったとも思う

雪

求めゆく

一つの真実

白蠟のつるぎの

思念の孤高よ

もろもろは

あけぼのの雲にそまり

山脈は馳ける

雪野の果を

凍結の紫の光に

翳^{かげ}もかすか

アルプスのあしたよと

又はきびしき夜明けよと

同じく

求めゆく

求めがたく

生のさびしさ

その抵抗

もろもろは

宿命に耐え

意志をみがき

諦観^{ていかん*}の

ぎりぎりの

思想の朝よ

*あきらめ、悟って超然とすること

又もや一羽の

鷹を飛ばせて

鷹の歌

襲い来た風おろし

雪嶺せつりんのうなり

吹き飛ぶ雪

かの生の果より叫ぶ

抗すべし

抗すべし

すべての悪

すべての死

まなこ鋭くいま鷹は飛ぶ

その翼のはりのはりつめて

一つの意志のごとく

鷹は飛ぶ

そのしずもれる宇宙の混沌こんとんを目かけて

息吹のごとく鷹は飛ぶ

山脈の頂から

奈落^{ならく}の谷へ

奈落の谷から

山脈の頂へ

一すじの光のごとく

その鋭き爪は

凍結する夜明けの空気をひき裂く

かつての輝しき夢を見果てざるか

たとえばいま傷つきいたみても

鷹族であることを

鷹は忘れず

死にいどみ

虚空にいどみ

鷹はあくまで

生きる日のかぎり

羽ばたく

アルプス山脈の鷹よ

その伝説の始原の日よ

たとえばあらゆる迫害の嵐の日も

あらゆる攻撃の吹雪の日も

鷹は

鷹族であることにおいてのみ

不死身の火をば燃やせ

真一文字にかけよ

永遠の日によみがえる

歌のために

歌を信ずることにより

いのちつよめよ

深く且つしずかに肅然と
しゆくぜん

北方物語

— A BAKU YAMANOGUCHI

人を愛するは

切実ないのちのゆえか

生のかなしき

黄昏の風は

はるか山脈の氷雪をはらみつ

かえつて山脈の襞々を

暗紫色にいろどるのは

愛情という本能の切なさの陰影にも似て

人を黙らせてしまうのだ

地を匍はいぐるモンゴレンフレッケ

あたりいちめんに針を刺しうがちくる雪の情感は

今日も

麓ふもとの村々にとぼしいだいたい色の灯をともし

旅情はすでに

人生途上の習性となつた

やくざなおれに迫りくる

国定忠治や太宰治

人は何故かくなしく生きねばならぬのか

日暮れの鴉からすよ

さすらいの旅の鳥よ

所詮しよせんはあの宿命という支配者の

何んというだまりっこい孤独な横顔

今夜もこの村の居酒屋は牛のように今日を忘れて酔い伏す人々を集めるといのか

東京夜景

幾つかの眼はかなしい

果して愛のない不毛の地か

善意は果して

空をこがすイルミネーションのように消えたか

真実かなしい恋は

生きて死んだのだ

光にみちた墓場

愛とは

永遠に消えない

傷痕のことであろうか

今宵も豪華なサロンの壁で

シャンデリアに照らされながら

モナ・リザは

永遠にこの人間の謎を秘めて

微笑している

人間とは？

ふと群集の中で

この問いが

僕の歩行をゆるめる

人間とは？

僕は春の夜風の孤独に誘われたのであろうか

そこでは金貨と人間がはかりにかけられる

金貨と人間の問題が

永遠に街の夜景をさびしくするのであろうか

金貨と人間の問題が

何故僕の歩行に怒りを加えるのであろうか

黒い薔薇はあり得ない

あれは真実生きて死んだ

一つの恋のかたみなのだ

黒い薔薇よ

酒のように酔う都会の夜の笑いの中に

一つの醒めた魂が真理について思念しようとしている

明滅するゴウ・ストップ

誰れがいちばん愚劣か

今日も僕の思念は一つの淵に沈もうとしている

生きるということに更に専念しなければならぬと

生きるということに更に強い力を加えねばならぬと

陰影とは

まことに生の事実にもとづいて生れるものか

実存を越えた彼方に

今日も見えない光の根源が動いていないか

人間よ

御身^{おんみ}たちは何処^{いずこ}へゆくと

或る日の北国

—— 太宰治氏の一章に

だれも笑っている人はいない

そんな夕陽の斜面のあかさ

片田^{かたいなか}舎町の小駅のガラス窓に

おれはもがいているいのちを倚^よせる

だれも笑っている人はいない

そんな片田舎町の小駅の片隅にも

運命が一人の人間を支配しているというように

停車や発車や人間やボロや善や悪や

おれの生涯が妙に重たくのして来て

まるで荷物はかりの上にもでも乗るように

自殺や

回復や

決断が

又もやなつかしげにやってくる

そんな夕陽の斜面のあかさ

出発とは何を意味するか

たえずお前の重さがお前をやっつけ

そんなうなだれた嵐の中で

出発とは何を意味するか

もう一まわり廻らねば

まるで世間がわからないかのように

時計のゼンマイなどをいじったり

所在ないそんなうつつとうしく切ない生存に

まるで発車のベルでも待つように

ぼんやり勇氣などでも待っているのであろうか

まるはだかの高い青桐の梢につきささっている

重たい冬雲なんぞみつめている

薔 薇

太陽あかるく匂える日

いのち燃え燃えて

ひとときの微笑ほほえみ

愁うれい去り

意志定められ

すでにうなずける

くれないの衣裳いしやうらよ

人の世は

又たのしきこともあらん

李太白

——この一篇を小杉放庵画伯にささぐ——

……………江行か幾千里

海月かいげつ十五じゅうご円えんなり

始め瞿塘峡くわとうきょうを經、

遂ついにに巫山ふざんの巔いただきを歩ほす。

巫山高きむくして窮きむまらず、

巴国はこく歴へる所を尽つくす

日辺ひべに垂蘿すいらを攀よじ、

霞外かがいに穹石きゆうせきに倚よる、……………

李太白酒仙りたいはくとなるも

尚なおよく詩魂しこんに太おる

孤舟こしゅうに棹さおさして

ひとり名月の河を下くだる

斗酒としゆ未だ酔よわず

* 長江を行く

* 海面に映る月

* 長江の三峡の一つ

* 三峡の一つ・巫峡を形成する山

* はこく 楚と秦の間にあつた国

* 垂れ下がつたツタ

* きゆうせき 大岩のこと

詩炎

胸板むないたをついて燃えほどばしる

「酒を取りて四隣しりんを会せよ

仙人殊こうこつに恍惚こうこつたり

未だ酔中の真まに若しかず」と

酔えるは現実か

醒さめたるは現実か

李太白の巨魂

ひとえに酒によりて

その鋭鋒を増す

巖いわのごとく重々しく

隼はやぶさのごとく鋭く

吐くは天下

人生のこと

実に名づけて謫たく仙人せんじんとは

* 天上世界に住む仙人が何らかの罪を得てこの地上に流謫りゅうたく（たゞ）せられたのが李白だという

宜むべなるかな*

* もつともなことだ

即ち礪か破つぱす「滄洲そうしゅうの言にかえつて孤負こふす

* 東方の海にあり、仙人が住むといわれる島

終然たる無心の雲」と

……………積雪照空谷

悲風鳴森柯

歸途行欲曛

佳趣尚未歇

江寒早啼猿

松暝已吐月

月色何悠悠

清猿響啾啾

辞山不忍聽

揮策還孤舟……………

人間

あの旅も
この旅も
あの日も
この日も
いのちいっぱい
業*のように
幻のように
火のように
生きては
死んだと思い
死んでは
生きたと思い
いのちというものは

*業(ごう)とは、仏教の基本的概念である「梵」を意識したもので「行為」を意味する。

いためつければ
いためつけるほど
つよくなるものだと思い
五年ぶりの
故郷の家の畳の上に
どっかとあぐらをかき
あたりの光景どもを見やりながら
おもむろに
ほこりまみれの旅装をときはじめるのだった

※四ヶ年の南方戦線の旅は、マニラ、シンガポール、シヤムという風に、航空軍軍医として転戦し、シヤムにて終戦を迎え、一ヶ年の捕虜生活を経て、昭和二十一年浦賀に上陸、復員す。

水のほとり

——ふらふらとこいて

億万の年月を生きる

この月光のまどかさをたのしみ

一瞬の生のこのかそけさを愛し

ひとり落葉松の林をぬけて

月光くたく草原の水のほとりに出づる

無心に流れるこの流れは

世路せいろ*の分別にくるしむ私をも忘我ぼうがのしずけさにつれてゆく

即ち次第に私はくだける月光でありくたく流れである

遠山みないねむり

夜は更ふけてゆく

*世の中を渡っていくこと

牧歌的風景

1

汀なみだで舟と舟ふねがくつつついている

多分寒いのであろう

風は砂を吹いた。砂山も寒いのであろう

2

砂山には歪よこんだ一本の櫓ぼしが立っていた

それにむなしくつきさされている波色の時間があつた

忘れられてしまった少年の日の夢のように

それは、遠く鮎あめ色の島にまでつづいているのであつた

島

六〇

一握の砂が指間からこぼれおちた

指間のむこうが海である

同じく

生物は住むや否や

典子詩抄

今年三つの典子はひとりで

人形を抱きながら大きな声でうたっている

その意味がとれないが

何かを表現しようとして一生懸命だ

その真剣さは千万金だ

その真剣さは千万金だ

同じく

バレエを習いはじめた六つの美紀子を見習って

三つの典子は一生懸命に足を動かしている

時々倒れるが

倒れても又起き上って足を動かす

一つのことを表現しようとするために

こんな真剣な努力が要るのか

このことは尊い

六一

同じく

六二

母乳を離れたため

典子の食事が

主としてパンとビスケットと牛乳になった

「パンとビスケットと牛乳」

「パンとビスケットと牛乳」

典子は

この言葉を非常に早く正確に覚えた

同じく

典子は風呂に入れると

すぐねむる

すやすやすやとねむる

顔を真直ぐにしてねむる

曇日

空はサイダーを流し

何か酸性傾向の香気をもち

たとえば裏の禅寺独勝寺のとちの森や

鎮守の松の森一帯に

何か泡沫性の雲をふらせ

夏の曇った午後は

何か僕の

奥の細道に作用し

ふと読みさしていた

ホーム*のイリアードを閉じる

*紀元前八世紀末の吟遊詩人でホメロスと表記されることが多い。西洋文学初期の作『イリアス』と『オデュッセイア』の作者といわれる。

克服の頌しょう*

— 姉富樫ヤスの霊にささぐ

*ほめたたえる詩

楓かえで若葉が妙に

うっとうしい五月になると

あなたを思わねばならない

悲しくも戦って死んだ姉

かつて嫁とといだ村落の春の夕映えが

剱ほづかくの峰角をかすめて

生涯のように光るとき

あなたの死が

尊たかくかがやき出して

円光のように

あなたの生涯を美しく描くのだ

悲しくもつよく

生きて闘ったのだ

もはや苦難がに克かつた

あなたは生涯をことほいで

四十六年の生は

まことこのようにいさぎよくゆかしいのだ

雪と思想

雪は松葉の間から

庭垣のすき間から

暗くて低い天の中心から

そのわずかに光る間から

(庭の松の木の影もすつとのび)

僕のしゃがんでいる縁側の廊下も

冷めたく古い家系に光り

松も昔の夢にふけり

はるかに川も山もつめたい水晶色の膚えをもち
草田男氏*

*俳人・中村草田男

降る雪や明治は遠くなりけりの句を
つい重々しくも思い出す

……思想はよみがえりしかも冷めたく燃えながら

(雪はただ真綿のごとく降るばかり)

(その一点は火の物理)

波止場で

——印象派風に

不幸な男よ……………

口笛を吹いて

不幸な男よ……………

広い肩幅をもって

夕暮れの波止場を

静かに歩いて行った

大きな影を波止場のコンクリートの上に落しながら……………

僕はじつとその後姿を凝視^{みつ}していた

ボウと出船の汽笛が鳴った

蛭ほたる 烏い 賊か

太古のサーチライトということは

この深夜の春の夜の海のしずけさにくらべて

何んであろう

音と云ったら櫓音^{ろうおと}だけである

はるかに滑川町なかりかわはまたたく灯の中に眠り
 能登もはるか朧月おぼろづきの中にけむっている
 光が時々水面を鋭く八方に走るから驚嘆きょうたんさせるのか
 瞬間すくい上げたたも網が
 十万ワット発電のような光を放った

直江津挽歌

—— ある年の想い出として原田勇、竹森一男兄におくる

夜汽車の窓にきらきら光る
 雪かと思う白いスチームの水蒸気
 手をつけば手のあとのまま
 駅のあかりがかすんで見える
 ここ特有のかん高い物売りの声がつるに寒くひびき来て
 三等の室の客たちは
 眠むたげに眼をばあけながら

鳥打帽の芸人風

肩に白いきれをまいたおかみさん
 安リボン結んだ小娘こむすぶが
 何か買おうと立つ旅たびごころ
 僕と勇氏と一男氏の三人
 北への旅もここまですれば
 郷愁きょうしゅうばかり切なさばかり
 今夜はここに泊ろうと
 トランクさげて降車こうしゃする
 鳥打かむった勇さんや
 ラスコルニコフのような愁うれいの影ある一男さんに
 病身の僕をませ
 これではすっかり落泊らくはく*の旅芸人というところ
 あるいは都会を喰いつめた
 仕事師仲間というところ

* 落魄と表記することが多い。おちぶれること

こんな漂泊^{ひようぱく}心^{こころ}が人^{ひと}しれず
こころの中に湧^わいて来て
これではすつかり

流刑^{りゅうけい}の病詩人^{びやうしにん}づれじゃないか

(わびしいね)

勇氏^{ゆうぢ}が例^{れい}のユーモアも

ここではすつかりわびしすぎ

プラットホームに落^おす影^{かげ}

さては百^{ひゃく}あまりつく電灯^{でんとう}も

霜夜^{しもや}のようにつめたくきらきら光^{ひかり}つていて

青森^{あおもり}行きや新潟^{にいがた}行き

こんな鉄道^{てつどう}コースではあんまり北^{きた}へ誘^{いざな}いすぎ

今宵^{こんや}は泊^{とど}る安宿^{やすしゆく}で

生き死^{いきし}にばかり思^{おも}いつめた

そんな人間^{にんげん}ばかりいるんじゃないかと

みんなで顔^{かほ}を見合^{みあ}せて

わらった顔^{かほ}も旅^{たび}の顔^{かほ}

冬の旅

I

ちらばる微塵^{みじん}よ

冷却^{れいけつ}のエーテルよ

空馳^かける白馬^{はくば}か

生の思^{おも}いのはげしく

アルプスは冬^{ふゆ}をつらぬき

オパールをかき鳴らしつつ

鉛の雲をばかぎり*

*場限り、その時だけのこと

生死の彼方

一つの意志を凝結さす^{ぎょうけつ}

生きる日と何か

かの実在の

生命のリリック^{*}か

*叙情的なさま

今日もおれは凍結する氷原に一つの生を拾うのだ

われとわがうつし身の

焔^{ほのお}の生よ

燃えよ

生きよと

ふりくる雪に

又は凍結の宇宙に

II

鳥はいずこにかえるのだろう

雪まみれの鳥は

雪まみれの杉森へか

すでに風景は古びて

現出する一つの原始

雪はふる

雪はふる

二十億年前のごとく雪はふる

皮膚に穿つ針

針の意慾

アルプスは馳けりに馳ける

その雪の襞々をば

きらめかせ

その不屈の貌よ

不動の貌よ

つよめられゆく魂の歷程よ

III

鳥の凍死よ

焔のつらら

青い雪つもりにつもり

雪崩の谷に

今日もけむりは見えすなり

うたわれる革新

誓^{ちか}われる再生

魂から魂に

不在の神々を呼び合い

永遠の祈りを生きる

鳥の凍死よ

焔のつらら

高らかに氷原の歌よ

生死は光り

今こそつよめられゆく孤^{ひと}りの旅情か

別 れ

君は白い歯で笑う

僕は星の数をかぞえている

蛭 鳥 賊

人来たり人去る

ああ流離の詩人よ

その光に親しみ寄るか

田中川有感

—— ふるさとの家のほとりです

はるかアルプスの万年雪美しく夕映え

海からの入陽が赫々と燃える頃

不思議な美しさに川面はかがやき

流れるともなく海の方へ流れゆく

それを見ていることはたのしいのだ

誰れかが向うの石橋の上に立って口笛を吹いてゆく

若い人だ秋の夕焼けがこんなにも美しいからか

※田中川は、自分の家のすぐ横を流れる川である。これに自分は少し
大げさだが笛吹川と名づけて、朝夕この景に親しんでいる。

春と滑川

ああいいな

さつぱりするな

山脈は純白蠟はくろうのようにきらきらかがやき

濃紺色のうこんの天空をくぎって連つつらなているし

巻きつ雲も素敵すてきに刷すけて光っている

(剣・立山・アルプス幕下)

そこで僕は曹洞宗独勝寺裏の

菜種畑の中の高い一本のはんの木と並び立つて

蝶々が菜種の花に静止するのをじつと見ている

(千ロル地方つて横光利一氏の欧州紀行の中では

大変論理的に描写されている)

こんな風にこんな田圃たんぼの中にひとりふるさとの山脈と並び立っている僕を

東京の友人たちはちつとも知らないだろう

今日はあの人たちにあてて長い長い手紙を書こうと思う

菜種の花はいい花だと

あとがき

五年ぶりで、一冊の本をまとめてみる気になった。これは正式に云つて、僕の第四詩集である。又、人生に対するいろいろな僕の試論であるかも知れない。「翹望^{ぎょうぼう}」と「典子詩抄」と「克服の頌^{しょう}」は自分の近親のものを書いたので所載^{しょざい}した。詩集を編集する時、どのようにしたらよいか、いつも迷うが、しかし、出来るだけ自然の方法をとることにした。アルプスの詩を書いてから古い。このことも何か今度あらためて感慨的であつた。これらをなつかしい人たちに贈ると終りに記しておきたい。又常日頃、小生を心から激励していただき、先輩知友諸氏に深い感謝の意をささげたいと思う。

昭和二十九年九月十九日

富山県滑川市加島町
北方詩社にて

高 島 高 識

同じ著者による既刊詩集

1 萩原朔太郎 序 (昭和十三年度版)
北川 冬彦

詩集「北方の詩」 ボン書店刊

2 浅野 晃序 相澤 光朗装幀 (昭和十六年度版)
詩集「山脈地帯」 旗社出版部刊

3 相馬 御風序 内田 巖装幀 (昭和二十五年度版)

吉田 一穂 序詩
詩集「北の貌」 草原書房刊

「北の貌」批評抄

東洋的なものと、西欧的なものとの統一的な意味では高島高氏の「北の貌」にも強く現われている。彼の中では相馬御風氏も言っているように「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五を、ベートーヴェンのソナタの曲にあわせて読誦しつつも、この詩人の魂には独自の妙境が現像されているにちがいない」、それをいずれかに徹底分離することを私は決しての

ぞむものではない。しかし作品の上ではそれがやはり統一純化された形として表現されることのぞが希ましい。高島氏のような長い詩歴と、新鮮な感覚を持つ詩人は、もうこの集に示されたような、多様な形式を試みる必要がないだろう。又、余談ながら、この詩集が私にも旧ふるき文学の友であり同志であった青柳優に捧げられていることに、懐かい旧きゅうの感激を著者を通じて特に深くすると共に、人間の深く広い連鎖れんさを心こころしく思った。

——昭和二十六年一月「日本未来派」誌上植村諦氏

全巻を貫いて流れているところのヒューマニズムが、単にその表面に於おて華やかに、又は悲壯に乱舞しているのではなくして、それらのものは一旦錘おのように沈み、その底でしずかに燃えているのがこの上もなく温く美しい。言い換えれば彼の人生観も、今こそ据すわるところにドツカと腰を据えたと言いうべきであろう。そしてそこに、彼の良寛や芭蕉を追究してゆく魂の故郷があるのだとも考えられる。

高島君はいま医家として多忙な日常を送っているらしいが、その中心はどこまでも詩人であると思おもいたいし、彼も亦またそれを念願としているにちがいない。詩の風格と人間が一致している、ということは一面から見て正しいことであり、他面から見て立派なことなのである。僕は巻頭の彼の近影をみて殊更ことごとその感を深くした。

——昭和二十五年十月「日本詩壇」誌上扇谷義男氏

「火の中では火になりきり水の中では水になりきる……その本質さえ究明すれば、光は無む限にかくされている。」……これが宇宙への意志となり、新しい人間像の創造を企こころ図していること明らかである。私はふと、無限の光を希求してやまぬ詩人高島高が、叡知えいちの眼をしばたたき、鋭いひしヒ首しゅを擬なし、海を踏み破り、山を踏み倒し、やがて天の絶壁をよじ登ることであろうと遙はるかに思おもいを馳はせてみるのである。「北の貌かお」は火の精神、水の精神であり、氏の半生の詩業にふさわしい人生の記念塔である。北方の海は更に暗く、北方の山は更にきびしく、人の心はうな垂れて地に潜ひそもうとも、ここに透徹とうてつした詩魂がある。鮮烈な感覚がある。疼うずく精神が生きている。この「北の貌」はおそろしく世界的である。

——昭和二十五年十二月「時間」誌上長尾辰夫氏

「人間の深奥の普遍性の探究」と云う氏のくるいなき照準によって北アルプスも日本海も、この北方的風土は見事に形象化され永遠の相をもつて迫ってくる。

「北の貌」は、日本の詩壇にとつても、モニュメンタルな仕事であろう。

——昭和二十五年十月「時間」誌上櫻井勝美氏

(追録)

丘の上の思想

高
島
高

八六

生き方でなく

生そのものへだ

彼らのわらっているわらいは

それ自身一つの復讐ふくしゅうであろう

彼らはわらっている

機械のように

いのちの根源を

その寒い心に

いたずらな時間が流れる

今日も一つの碧空あおぞらを夢見る

宇宙的宇宙と

その道

その本源の中に

ペダンチック*はない

*学問や知識をひけらかすさま

八七

仮空なおしやべりはない

無は一つの火花であり

力の原動だ

魂をさげすむものは

魂にさげすまれる

真実とは生きることだ

あらゆるものへの抵抗だ

永遠に風は死なない

著者略歴

高島高、明治四十三年七月一日富山県滑川町医師高島地作二男として生る。母静枝。魚津中学を経て昭和三年上京、日大文科へ入りしも中退、昭和十一年昭和医専卒業、昭和八年詩コンクールに「北方の詩」一等当選。選者は萩原朔太郎、北川冬彦、千家元麿、佐藤惣之助氏等。これより文芸誌「麵麴」同人となり、主として評論、詩を発表す。昭和十三年に「麵麴」廃刊となり、「昆侖」同人となる。萩原朔太郎、北川冬彦序文にて詩集「北方の詩」をボン書店より発刊。科学ペンより、宮沢賢治の再来と激賞さる。「三田文学」「早稲田文学」等に詩を発表す。昭和十五年竹森一男、中岡宏夫等の文芸誌「旗」同人となる。内田巖、坂田徳男氏等と知る。昭和十六年、旗社より浅野晃氏序で詩集「山脈地帯」刊行。帝大新聞、三田文学より、それぞれ好評批評さる。昭和十八年応召、出征、フィリッピン、シンガポール、タイを転戦す。昭和二十一年復員す。復員後、「文学国土」（後に北方と改題）を責任発行す。「文学国土」は、「三田文学」より「近代文学」「九州文学」等と共に全国主要十一同人雑誌に選ばれる。草原書房より、相馬御風序、吉田一穂序詩、内田巖装幀にて、詩集「北の貌」を刊行す。飯塚書店発行、「現代詩辞典」にて、高村光太郎「智恵子抄」、草野心平「蛙」等と共に、昭和二十五年度詩集ベスト五に選ばれる。この間創元社発行の「世界現代詩辞典」に略歴所載さる。第二次「時間」代表同人となり、後に「日本未来派」同人となる。

この間、河出書房発行、明治、大正、昭和三代の「日本現代詩大系」第十巻に、又創元社発行明治、大正、

昭和三代の「日本詩人全集」第六卷にそれぞれ代表作収録さる。又昭和二十九年角川書店発行、昭和文学全集第四十七卷「昭和詩集」に昭和期詩人百三名の中に選ばれ、代表作所載さる。大鹿卓、浅野晃、外村繁、榊山潤氏等の「文芸日本」同人、詩誌「日本未来派」同人となる。昭和三十年四月発病、五月十二日零時四十分逝く。行年四十四才。遺志により統北方の詩を上梓す。

昭和三十年六月十五日

高 島 と し 子 識

昭和三十年六月十日印刷
昭和三十年六月十五日発行

詩 集 統 北 方 の 詩

著 者 故 高 島 高

発行者 前 同 高 島 と し 子

印刷所 富山市古鍛冶町五九
スガキ印刷工業株式会社

富山県滑川市加島町八六六

発行所 北 方 詩 社

ISBN978-4-905345-52-7

◎本書は原詩集の字組・字体に可能な限り近づけてあるが、一部の旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。また、難読の語句には振り仮名、難意の語句や著者特有の表現には*印を付し、小文字で注釈を下部に入れた。いずれも、少しでも読者の便を図ろうとしたもので、原詩集の雰囲気はいくらか損じることについては寛恕いただきたい。

詩が光を生むのだ 高島高 詩集全集

第四卷「続北方の詩」

二〇一三年一〇月一五日

一、四巻十別冊（分売不可）

定価 四〇〇〇円十税（セット価）

著者 高島 高

発行 高嶋修太郎

〒九三六―〇〇六八 滑川市加島町八六六

発売 桂書房

〒九三〇―〇一〇三 富山市北代三六八三―一

電話 〇七六―四三四―四六〇〇

FAX 〇七六―四三四―四六一七

印刷 株式会社 すがの印刷